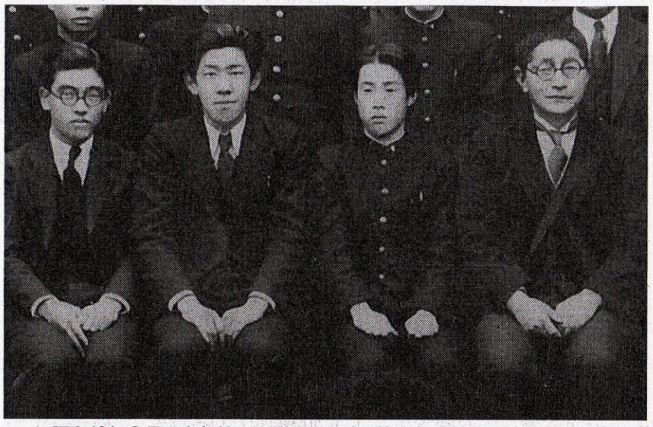
文化

折口信夫と森口武男

なら 民俗通信 252

西村　博美

困った弟子もお見通し



昭和12年３月の鳥船社の卒業記念写真（部分）。右から折口信夫、森口武男、加藤守雄、池田弥三郎

▼出会い

森口武男は、折口信夫と初めて出会った日のことを回想して後年、『折口信夫の河童』に次のように記している。四十年の日を経て書かれたこの文章は、若い日の森口の初々しい実感と、そのことから来る新鮮さを失っていない。

十畳ほどのがらんとした部屋に、大きな火鉢が置いてあった。その火鉢から、二尺ばかりの下座で待っていた。襖が開いて、隣の部屋から先生が入ってこられた。茶色の着物を着ておられた。火鉢のところに、くにゃくにゃといった感じで坐られた。ちょっとこちらを見て、「寒いやろ、おあたり」と言われた。

森口が終生、「せんせい」と呼んだ折口信夫との初顔合わせである。

「くにゃくにゃといった感じで」というのは、折口の身のこなしを実にうまく、とらえていると思われる。もちろん、わたしは生前の折口を知らないのだが、不思議とそんな気がしてくる。

▼困った弟子

昭和七（一九三二）年四月、十九歳の森口武男は、国学院大学予科に入学し、折口が主宰する「郷土研究会」と歌誌『鳥船』に入会する。しかし森口の本音は、違っていた。「これはえらいことになった。百人一首みたいなものは、とても作れないと思った」。

神職を務めた父、森口奈良吉（春日大社権宮司などを勤める）は、折口とも既に面識があって、「芳山」という号で歌も詠み、義兄の水木直箭・笹谷良造の二人は、折口信夫門下だということも知りながらの森口の当時の認識は、この程度であった。

ある日、森口は学校の廊下かどこかで鉢合わせした折口に、こう言われたという。「茂吉の歌集出たで。買わへんのか、はよ買いや」。

昼なれば、干し大根に日はあたり、いとゞのどかに　さがりをるかも

やや後年、『鳥船』に載せた森口の、まるで斎藤茂吉ばりの歌が残っている。「せんせい」は、この困った弟子のことを、お見通しであった。

いま、わたしの手許に『高等学校現代国語一』（角川書店、一九六九年）の教科書がある。森口の書斎で見つけたものだ。「近代短歌」の項には、晶子、啄木、白秋、空穂、利玄、赤彦に続いて、釈迢空（折口信夫）の短歌を載せている。三首中二首目の歌、「人も　馬も　道ゆきつかれ死にけり。旅寝かさなるほどのかそけさ」に、森口の字で、「旅に出て歩きつかれて亡くなった馬よ人よ、そのひっそりとした人生よ。ああ、わたしも長い旅行を重ねてきたので、その人生がしみじみ感じられる。わが心のしずもりよ」と書きこみがある。ああ、このことだったのかとわたしには、なぜか楽しく納得できるようなものがあった。森口がこのように書いているのを思い出したからである。

最後が先生の歌であった。茂吉までベラベラと思うことを二、三時間しゃべれたのに、先生のところへ来ると、自信がない。「葛の花」も「人も馬も」も、「朝けよりほこりのにほひ」もである。先生がかつて言われた「あいつ、おれのねうち知りよらん」の言葉が去来して、うろうろとしているうちにベルが鳴った。その次の時間、こんどは切りかえた。先生のお言葉を紹介し、つまらん弟子としての国学院の時の話をして、すごした（森口、前掲書）。

▼「はるかぜ」

長く、奈良の地で高等学校の国語の教員を務めた森口武男には、「坊っちゃん」なるあだ名があった。若い日に師事した折口信夫からは、「はるかぜ」という名をもらった。昭和十二（一九三七）年、大学を卒業する春の日のことだ。

「桜さく　したに別れむ　帰りきて　昨日のまゝもうれしかるべし」。

別れの日にもらった歌の意味を尋ねた森口に、「これはな、出世せんでも、遠慮せんと来い、歓迎したる、というこっちゃ」と折口は答えたという。この歌は、『折口信夫全集』第二十五巻、「三月、森口武男の卒業に」として載っている。

折口の前で、茂吉や赤彦の歌が好きだ言い、「どうして先生は結婚しないのですか」と訊（たず）ねるような、「コムシ」とあだ名されて腹が立って、名付けた折口に「決闘」を申し込もうとした、このような弟子を折口はどのように思っていただろうか。

「美しくかなしく大根太りたり」。先の大根の歌ではないが、森口の遺句集『のつそり下弦』から一句を引く。

森口は、折口のもとを離れて歌を作らなくなったが、たくさんの詩を書いた。「ああ、そんなこともやっていたのか」と、森口の「おりくちせんせい」は、望遠鏡を二基、畑の畝に残して、やっと自分のそばに戻ってきた、可愛い弟子を目を細めて見ておられるのかもしれない。

折口は、体が小さく小学生のような顔をしていた森口を「坊や」と呼んでいたともいう。そんなことを、「おりくちせんせい」のことを森口は、わたしたちにもいつも楽しそうに話してくれていた。

（詩人・奈良民俗文化研究所研究員）

……

折口信夫（1887～1953年）民俗学・国文学者、歌人。

森口武男（1912～2001年）詩人。